

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：16101

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20728

研究課題名（和文）ゾミア的空間の地球史にむけたプレリサーチ：非人間中心主義的転回への人類学的応答

研究課題名（英文）Preliminary Research Towards a Global History of Zomiatic Spaces: An Anthropological Response to the Non-Human Turn

研究代表者

内藤 直樹（NAITO, Naoki）

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・准教授

研究者番号：70467421

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：景観とは、自然あるいは人工的な環境と人間の関係について考える研究において欠かせない対象である。そもそも景観とは、それを創り、棲まう人間と人間以上の存在そして主観と客観との動的な混成物である。

本研究は、人間・異種生物・物質による活動とその連関の積み重ねが、産業資本主義社会における日本の山村景観を生成してきたことを明らかにするとともに、その歴史的な動態を理解し、人類学的に介入するための視点と方法論を提示した。そのために過疎化が進行する日本の山村景観の生成に関わる近世以降の多様なアクターに注目しそれらの絡まり合いを異分野の研究者と民族史/誌的に記述する方法論を確立した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のフェミニスト民族誌、政治生態学および歴史生態学や景観生態学の影響を受けた景観研究の文脈では、国家や資本の論理による他者の管理や操作と、そうした関係性を無化しようとする異種を含めた諸アクターによる活動のせめぎ合いのなかで景観が生成される動態を捉えようとする試みがある。

本研究では、これまでの景観人類学的な議論に、アクター：これまで顧みられなかったような異種生物や物質を含めた諸アクターによる多様な利益に関わる諸活動や、タイムスケール：人間と環境の相互作用から、環境の物質的特性が生産される歴史に注目する視点を加え、日本における山村景観の生成の動態を捉えなおす民族史/誌的な記述をおこなった。

研究成果の概要（英文）：Landscape is an important subject in research that considers the relationship between natural or artificial environments and humans. In essence, landscape is a dynamic combination of subjective and objective elements created and inhabited by humans and entities beyond the human.

This study aims to explore how the accumulation of activities and interactions among humans, different species, and materials has shaped the rural landscapes of Japan under industrial capitalist society, and gain insight into its historical dynamics and propose perspectives and methodologies for anthropological intervention. To achieve this, the study focuses on the various actors involved in the formation of rural landscapes in Japan since the early modern period, especially in depopulating areas. It also establishes a methodology for ethnographic and historical description in collaboration with researchers from different fields.

研究分野：文化人類学

キーワード：ランドスケープ ゾミア的空間 統治 フェラルなもの 流通 世界農業遺産 大地 時間

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「ゾミア[van Schendel 2002, Scott 2009]」とは、ヒマラヤから東南アジア山地にかけて分布する高い標高、痩せた土壌、少数民族の居住地等の共通点をもつ地域であり、領域国家による統治を逃れようとする人びとにとって重要な生活圏となってきた。アジア地域研究における重要概念であるゾミアは、(1)領域国家による統治からの逃避的性格を有する場所で、(2)国家にとって重要な「商品」の生産地であり、(3)アジア地域の特定の自然環境に、(4)数千年にわたって存在し続けてきた。

本研究では、アジア地域以外にも適用可能な形に一般化した「ゾミア的空間」の創発をめぐる地質・生態学的、社会・経済的、歴史・文化的なダイナミクスの解明を目指す。ゾミアを特徴づける「領域国家による統治からの逃避的性格を有する場所」として、たとえば古代～中世ヨーロッパや日本に見られた「アジュール [網野 1996, ヘンスラー 1954=2010]」や奴隷交易時代末期(18c)のアフリカ島嶼部における「一時的自律地帯(Temporary Autonomous Zone) [Bey 1997]」がある。こうした場所は、(1)領域国家による統治からの逃避的性格を有する場所で、(2)しばしば国家にとって重要な「商品」の生産地であったが、それらは(3)さまざまな自然環境において創出されたし、(4)しばしば一時的にしか存在しなかった。

この点を踏まえて本研究では、「ゾミア的空間」を、(1)領域国家による統治からの逃避的性格を有する場所で、(2)国家にとって重要な「商品」の生産地であり、(3)さまざまな自然環境において、(4)一時的に創発しうるものとして定義する。そうすることで、多様な人間と非人間によるやりとりが創発する公共空間に関する地域間比較研究が可能となる。

初期のゾミア研究においては、領域国家による統治からの逃避的性格に注目が集まることが多かったが、近年は地域の「自律」を可能にする商品生産と領域国家による統治のせめぎ合いに焦点があてられている。このように地域内外に流通する「商品」には、アヘン・茶等の嗜好品、イモ類・穀類・ナマコ・フカヒレ等の食品、綿や木材等の素材、錫・金・銀等の鉱物、奴隷等がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地球上のさまざまな地域における領域国家への包摂/排除に関わる動きを、多様な人間と非人間の意図的・非意図的なやりとりによる「世界制作プロジェクト (Tsing 2015=2019)」として捉え、そのダイナミクスを比較考察すること(「ゾミア的空間の地球史」)にむけた視点と方法論を構築することにある。そのためのプレリサーチとして、近現代の東南アジア(タイ・山地、マレーシア・島嶼部)と東アジア(日本・山地)を対象に、人間と非人間による非意図的な相互作用の結果をある種の公共空間(ゾミア的空間)の創発として捉えなおす民族誌/史的な共同調査研究をおこなう。

そのために本研究では、ゾミア的空間の創発をめぐる(1)モノが「資源化」され、「流通」することで「商品」となる過程および、(2)そのモノが「再生産」される過程に関する多様な人間-非人間の「寄せ集まり(assembly)[Tsing 2015=2019]」のダイナミクスを捉える。そうすることで、従来は人間中心主義的な視点で描かれてきたゾミア的空間を、非人間中心主義的な視点で捉えなおすことが可能となる。

3. 研究の方法

本研究では、多様なゾミア的空間の創発や編成の機序を解明するための視点と方法論を構築するために、まず近現代の東南アジア(タイ・山地、マレーシア・島嶼部)と東アジア(日本・四国山地)の周縁部においてポピュラーな2つの林産物(茶・木材)の生産・再生産に関わる比較研究をおこなう。これらの林産物はともに照葉樹林文化[佐々木 1976]と関連性が高いと同時に、近現代の東南アジア地域と日本の間を流通する重要な商品である。本研究では、それぞれの商品に関する東南アジア地域研究者と日本地域の研究者が班を構成し、商品に関するバリューチェーンおよび再生産に関するエコシステムが、いかにゾミア的空間を生み出しうるのかについて体系的に把握する。そのうえで、アジア以外の地域を対象とする国内外の研究者を招聘してシンポジウムを組織し、「ゾミア的空間の地球史」プロジェクト(本研究終了後に挑戦的研究(開拓)として申請予定)にむけた「ゾミア的空間」の民族誌/史的記述の視点と方法論をアジア地域外においても適応可能な形に調整する。

(1) 東南アジア-東アジアにおける林業班

・石川登(京都大学)は、マレーシアの熱帯林におけるモノカルチャー型プランテーションをめぐるゾミア的空間の編成に関する現地調査を実施する。

・岩佐光広(高知大学)は、高知県の魚梁瀬森林鉄道に関する記憶をもとに、明治以降の日本における林業の盛衰とゾミア的空間の編成に関する現地調査を実施する。

(2) 東南アジア-東アジアにおける山茶班

・片岡樹(京都大学)は、タイ北部の山岳地域における茶流通の歴史および近年の山茶(半自然栽培の茶)の商品化に関する現地調査を実施する。

・内藤直樹(徳島大学)は、徳島県西部の世界農業遺産に登録された傾斜地農法エリアにおける山茶の栽培と流通の歴史に関する現地調査を実施する。

4. 研究成果

令和2年度はコロナウィルス感染症の世界的流行のために、国外での現地調査を遂行することは困難だったため、(1)世界農業遺産サイトを対象にした国内調査、(2)流通とランドスケープの人類学連続ウェビナー、(3)日本とアフリカの世界農業遺産の連携を模索するシンポジウムを実施した。流通は、人間と他生物や人工物による営みの集合体としてのランドスケープにも影響を与えてきた。また、ある地域で何が商品として生産・加工されるかは、モノの物性や移動に関わるインフラによっても規定される。こうした農業システムがランドスケープを規定することもある。とりわけ近世以降の日本における国家や市場の周縁地域における流通とランドスケープの関わりについて検討するために、四国山地を対象にした造園学、土木工学、景観生態学、草地生態学、微生物学、発酵学、地質学、フードスタディ、歴史学の研究者による研究発表にもとづく討論をおこなった。

令和3年度もコロナウィルス感染症の世界的流行のために、国外での現地調査を遂行することは困難だった。だが、国内の世界農業遺産サイト等を対象にした現地調査やプロジェクトを実施した。具体的には、日本の前近代におけるプランテーションおよび流通と世界農業遺産の関係、世界農業遺産サイトの保全プロジェクト、地質や鉱工業と文化の関係、日本からみたゾミア論の批判的再検討等である。また、近世以降の日本における国家や市場の周縁地域における流通とランドスケープの関わりについて検討するために、四国山地を対象にした造園学、土木工学、景観生態学、草地生態学、微生物学、発酵学、地質学、フードスタディ、歴史学の研究者と協働して『四国産地から世界をみる：ゾミアの地球環境学』の編集をおこなった。そして、世界農業遺産の保全に関するFAOの国際シンポジウムでの発表、日本農芸化学会でのシンポジウム、日本・ナイール・エチオピア学会ニューズレターの特集等で研究成果を公開した。

令和4年度には研究成果の公開にむけた研究活動をおこなった。まず、科研メンバーと建築学・造園学・土木学・地球科学(地質学)の研究者らで、日本文化人類学会第56回研究大会分科会D「ゾミアの地球環境学：四国山地の地質・生態・歴史」を実施した。

令和5年度には四国山地をおもな調査対象地とした現地調査を継続しながら、前年度に引き続き、研究成果の公開にむけた研究活動をおこなった。日本文化人類学会第56回研究大会分科会をもとにした特集号を『文化人類学』に掲載した。さらに、四国山地の地質・発酵茶・森林・遺産保全に関連する研究者による『四国山地から世界をみる：ゾミアの地球環境学』を出版した。また、ナイロビで開催された国際景観生態学会(IALE World Congress)で発表した。

これらの研究の目的は、①人間・異種生物・物質による活動とその連関の積み重ねが、産業資本主義社会における日本の山村景観を生成してきたことを明らかにするとともに、②その歴史的な動態を理解し、人類学的に介入するための視点と方法論を提示することに整理された。そのために過疎化が進行する日本の山村景観の生成に関わる近世以降の多様なアクターに注目し、異分野との協働をもとに、それらの絡まり合いを記述することとなった。ただし本研究では、人間以外の生物や物質に主体性を認めようとする認識論からは注意深く距離をおく。なぜなら人間、文化そして精神に主体性を与えてきた西欧近代の認識論批判は、人間以上の存在、自然そして物質に主体性を与えることによって解決する訳ではないためである。本研究はむしろ、これまで所与のものとして考えられてきた人間的な主体性に対して懐疑的な立場をとる。それは特定の人間だけでなく生物や物質を含めた複数の存在による行為の積み重ねが思いもよらない形で見出されたり、無意図あるいは意図とは離れた形で作用し合う過程に注目する非主体中心的なアプローチである。本研究では非主体中心的なアプローチをもとに、景観に関わる人間や人間以上の存在による相互作用の歴史を「景観生成の力学／動態」として理解しようとしている。

そのために本研究では、スコット[2009]によるゾミア論を出発点に、四国山地の山村景観の生成に関する大地、生態環境、国家、市場、地域社会の絡まりあいの歴史を批判的に再考した。日本の山村景観には、国家や産業資本主義の影響が及ばなかった場所というよりも、その廃墟として見なした方が妥当なものがある。それは現在の山村景観を、国家や資本の論理から縁遠い場所ではなく、それらの影響が累積した歴史的空間として見なすということである。本研究ではプレート、土壌、傾斜地等の物質的環境、そして陸稲、水稲、山茶、スギ、タバコ等の異種、そしてこれらと人間の三者関係を近世以降の長期的な歴史スケール (*longue durée*) のなかで理解し、より広い政治・経済的な文脈に位置づけて考察した。

そうすることで本研究では、山村景観の理解を進めるための分析における時間スケールに関する新しいアプローチを提示した。日本の山村景観において私たちが目にする地質、山地、耕作地、村落社会、商品作物、インフラストラクチャー等は、それぞれが異なる「時間」をもつ。本研究では、山村景観の生成に関わる諸存在に注目して、それらの絡まりあいを重層的な時間スケールのなかで論じた。そして地質学、生態人類学、建築史、歴史学、地域研究の専門家による協働のもと、近世以降の日本における山村景観史に関する民族史／誌記述をおこなった。

現在は本研究の知見をもとに、世界各地に点在するさまざまな形態の「ゾミア的空間」を比較する「ゾミア的空間の地球史」を立ち上げるための準備をおこなっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 内藤 直樹、石川 登	4. 巻 88
2. 論文標題 序	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 230 ~ 242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.88.2_230	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 内藤直樹・殿谷梓	4. 巻 88(2)
2. 論文標題 崩れ続ける大地での暮らし：徳島県西部における産業資本主義の跡地としての山村景観の力学 / 動態	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 230-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.88.2_243	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 町田 哲、石川 登、内藤 直樹	4. 巻 88
2. 論文標題 近世の「山里」における社会変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 264 ~ 286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.88.2_264	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 岩佐 光広、赤池 慎吾	4. 巻 88
2. 論文標題 人間と非人間の「固有の時間」の絡まり合いにみる山地景観の動態	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 287 ~ 307
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.88.2_287	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡 樹	4. 巻 88
2. 論文標題 源流の向こうにあるもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 308 ~ 326
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.88.2_308	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野澤 俊太郎	4. 巻 88
2. 論文標題 ちよつとずつ寄りかかりあう景観	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 327 ~ 348
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.88.2_327	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内藤直樹	4. 巻 1181
2. 論文標題 埕外の生態学にむけて：寄生と依存が生み出す社会	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 122-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内藤直樹	4. 巻 29
2. 論文標題 アフリカ在来農業研究と日本の世界農業遺産をひらく	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JANESニュースレター	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 内藤直樹	4. 巻 29
2. 論文標題 地域の農業遺産をむすぶ：日本における世界農業遺産の特徴と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JANESニュースレター	6. 最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuki Kataoka	4. 巻 22-1
2. 論文標題 Less than Gods?: Gods and Yokai in the Ushioni of Kikuma, Ehime Prefecture	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6. 最初と最後の頁 177-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡樹	4. 巻 10
2. 論文標題 国民国家時代のメダン・ペナン・ブーケット・コネクション 華僑華人移民と東南アジア現代政治	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 マレーシア研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北野真帆・内藤直樹	4. 巻 26
2. 論文標題 人間と環境のインターフェースとしての農具：世界農業遺産・にし阿波の傾斜地農耕システムの事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生態人類学ニュースレター	6. 最初と最後の頁 6-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 内藤直樹・鈴木咲季	4. 巻 63
2. 論文標題 海部の犬狼におけるヒトとイヌの相互行為	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 阿波学会紀要	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡樹	4. 巻 13
2. 論文標題 崇る中世 愛媛県菊間町の戦国落城伝説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代民俗学研究	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡樹	4. 巻 85
2. 論文標題 神様未満? 愛媛県菊間町の牛鬼からみた神と妖怪	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 623-639
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Naoki Naito
2. 発表標題 Describing the dynamics of the mountainous landscape in Japan: From the case of GIAHS site of Tokushima, Japan
3. 学会等名 IALE 2023 WORLD CONGRESS Nairobi-Kenya (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Naoki Naito, Azusa Tonotani
2. 発表標題 Conserving a life on the crumbling land: The Dynamics of Mountain Village Landscapes as Ruins of Industrial Capitalism in Western Tokushima, Japan
3. 学会等名 International Symposium on GIAHS and Family Farming 2023: New Approaches of Rural Development for Effective Conservation of GIAHS sites (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 内藤直樹・石川登
2. 発表標題 趣旨説明(分科会D「ゾミアの地球環境学：四国山地の地質・生態・歴史」)
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 廃墟のランドスケープ：徳島県西部地域における地質・プランテーション・世界農業遺産(分科会D「ゾミアの地球環境学：四国山地の地質・生態・歴史」)
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩佐光広・赤池慎吾
2. 発表標題 資本主義的廃墟としての国有林 魚梁瀬国有林の成立と開発の歴史を事例に(分科会D「ゾミアの地球環境学：四国山地の地質・生態・歴史」)
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 片岡樹
2. 発表標題 東南アジアで再発見する四国 : 地域社会の宗教と政治を逆さ読みする (分科会D「ゾミアの地球環境学: 四国山地の地質・生態・歴史」)
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 番茶のエスノグラフィ: 四国における番茶の生産・流通・消費
3. 学会等名 日本農芸化学会2022年度大会シンポジウム「後発酵茶: その魅力と可能性」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 誰に向けて語るのか: アフリカ研究者が日本の世界農業遺産申請に関与した経験
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 世界農業遺産と地域遺産の相克: Research Locally, Act Globally
3. 学会等名 県立広島大学 地域基盤研究機構 地域課題解決セミナー「学生とともに地域で動く: 他大学の試みに学ぶ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Naoki Naito
2. 発表標題 Who should take care of the landscape?
3. 学会等名 Symposium on Globally Important Agricultural Heritage Systems and Family Farming (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoki Naito
2. 発表標題 The Challenge to Conserve 'Living Landscape'
3. 学会等名 Symposium on Globally Important Agricultural Heritage Systems and Family Farming (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naoki Naito
2. 発表標題 Reorganizing Family farming at the ruin of commercial agriculture: Nishi-awa steep slope Agricultural area , japan
3. 学会等名 Symposium on Globally Important Agricultural Heritage Systems and Family Farming (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 傾斜地でシコクピエが生き続けること： 四国山地の世界農業遺産地域における土・異種・人間による行為の絡まりあい
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 ゾミア的空間の地球史にむけて 四国山地の伝統農業をめぐる流通とランドスケープの関係
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 地域の農業遺産をむすぶ：日本における世界農業遺産の特徴と課題
3. 学会等名 「アフリカと日本を世界農業遺産でむすぶ ー人新世におけるアグロエコロジーの保全にむけた対話ー」、第31回 日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 趣旨説明
3. 学会等名 「アフリカと日本を世界農業遺産でむすぶ ー人新世におけるアグロエコロジーの保全にむけた対話ー」、第30回 日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩佐光広・赤池慎吾
2. 発表標題 森林鉄道から描く山村の近現代史の可能性：森林鉄道のインフォーマルな生活利用の実践に着目して
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤池慎吾・岩佐光広
2. 発表標題 Regional Revitalization through the Life History Interview: from “Local Memories” to “Japan Heritage”
3. 学会等名 2021新實踐臺日大學地方連結與社會實踐聯盟國際研討會(2021 International Conference of New Praxis and Taiwan-Japan Alliance of Local Revitalization and Social Practice) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 サハラ以南アフリカにおける世界農業遺産サイトの保全と活用：オールドニョキエ／オルケリマサイ牧畜遺産サイトの事例から
3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会（東京外国語大学）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 東・東南アジアにおける世界農業遺産登録地域の生態学のおよび歴史的な特性に関する比較研究 国家・市場経済・生態系
3. 学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所 共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」年次研究成果発表会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 SDGs GOAL11・家族農業・世界農業遺産：惑星時代の持続可能な暮らしの実現のために日本にいる私たちができること
3. 学会等名 文部科学省 トビタテ!留学JAPAN #せかい部×SDGs探求プロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Naoki Naito
2. 発表標題 Restoration of semi-natural grasslands in Japan: From the cases of Shizuoka and Tokushima GIAHS sites
3. 学会等名 FAO webinar “Globally Important Agricultural Heritage Systems and Ecosystem restoration” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 地域の農業遺産をむすぶ：日本における世界農業遺産の特徴と課題
3. 学会等名 第30回日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム「アフリカと日本を世界農業遺産でむすぶ：人新世におけるアグロエコロジーの保全にむけた対話」, (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内藤直樹
2. 発表標題 趣旨説明：アフリカ在来農業研究と日本の世界農業遺産をひらく
3. 学会等名 第30回日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム「アフリカと日本を世界農業遺産でむすぶ：人新世におけるアグロエコロジーの保全にむけた対話」
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 内藤直樹・石川登	4. 発行年 2024年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 352
3. 書名 四国山地から世界をみる ソミアの地球環境学	

1. 著者名 北野真帆、内藤直樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 336
3. 書名 コロナ禍を生きる大学生	

1. 著者名 内藤直樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 369
3. 書名 新型コロナウイルス感染症と人類学：パンデミックとともに考える	

1. 著者名 内藤直樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 320
3. 書名 コロナ禍を生きる大学生：留学中のパンデミック経験を語り合う	

1. 著者名 片岡樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学東南アジア研究所	5. 総ページ数 107
3. 書名 初学者のための東南アジア研究	

1. 著者名 清水展、小國和子、内藤直樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 職場・学校で活かす現場グラフィック	

1. 著者名 河合利光、石川登	4. 発行年 2021年
2. 出版社 時潮社	5. 総ページ数 229
3. 書名 食の世界を生きる 食の人類学への招待	

1. 著者名 Noboru Ishikawa, Ryoji Soda	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Springer Singapore	5. 総ページ数 641
3. 書名 Anthropogenic Tropical Forests: Human-Nature Interfaces on the Plantation Frontier	

1. 著者名 川田牧人、白川千尋、飯田卓、片岡樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 482
3. 書名 現代世界の呪術：文化人類学的探究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	片岡 樹 (KATAOKA Tatsuki) (10513517)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授 (14301)	
研究分担者	岩佐 光広 (IWASA Mitsuhiro) (20549670)	高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・教授 (16401)	
研究分担者	石川 登 (ISHIKAWA Noboru) (50273503)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
国際研究集会 アフリカと日本を世界農業遺産でむすぶ：人新世におけるアグロエコロジーの保全にむけた対話	2021年～2021年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
イタリア	FAO		